語り手の存在と推量表現

――谷崎潤一郎「美食倶樂部」をテキストとして――

島田智子

はじめに

近頃、さまざまな方法での「語り」、あるいは「語り手」の研究が盛んになってきている。しかし、そこに存在する概念は非常に幅のあるものであり、確定したものではない。ある言葉にある程度の幅と個人差が生ずるのはあたりまえのことであるが、「語り」「語り手」という言葉は特に揺れている言葉の一つであろう。しかし、その概念や意味内容がはっきりしたものでなくても、私達読み手側に、この作品は語りの構造をもっている、語りが作品中に存在すると思わせる作品は確かに存在するのである。そのような作品の一つとして谷崎潤一郎の「美食倶樂部」（大正八年一月～二月「大阪朝日新聞」）を取り上げ、この作品中のどのような表現が読む側に「語り手」の存在を意識させ、その表現が作品全体の中でどのような働きをしているかを検討してゆきたい。なお、引用文は全て「谷崎潤一郎全集」（「中央公論社」）によった。

一、語り手の存在する作品

「何を喰つてもかうどうも變り映えがしなくなつちゃ仕様がないな。かうなつて來るとどうしてもえらいコツクを捜し出して、新しい食物を創造するより外にない。」

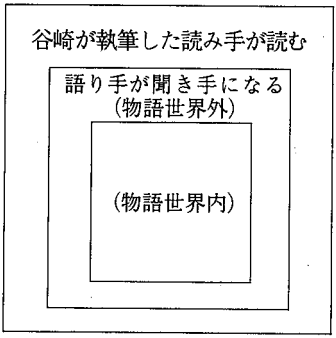
「コツクの天才を尋ね出すか、或ひは眞に驚嘆すべき料理を考え出した者には、賞金を贈ることにしようぢゃないか。」「だが、いくら味が旨くつても今川燒や燒米のやうなものには賞金を贈る値打ちはないね。われわれはもつと大規模な饗宴の席に適しい色彩の豐富な奴を要求するんだ。」

「つまり料理のオーケストラが欲しいんだ。」

こんな會話を或る時彼等は語り合つた。

そこで、美食倶樂部と云うふものが大體どんな性質の會合であり、目下どんな状態にあるかと云ふことは、以上の記事でざつと讀者諸君にお分かりになつたであらうと思ふ。作者は次の物語を書く爲に、豫め此れだけの前書きをして置く次第である。

右の引用は、「美食倶樂部」が全部で二十八章から成り立っているうちでの三章の最後の部分であり、美食倶樂部の会員の美食ぶりを延べてある部分の最後のところである。この作品の冒頭から読み進め、右の引用の傍線部で初めて「作者」という人物が登場する。この「作者」の作品に於ける性質を考えると、冒頭から登場する、美食倶樂部を構成し筋の展開と共に様々な出来事に遭遇してゆく会員達の性質とは異なっている。つまり、会員達が生きている物語世界を「書く」立場をとっているのである。傍線部によって読み手側は、明らかにこの作品中に「語り手」（この場合「作者」）が存在することを認識させられる。この「美食倶樂部」を語りに注目して図に示すと次の通りである。



二、語り手の存在と推量表現

以上のことから「美食倶樂部」が語り手の存在する作品であることが明らかになった訳であるが、語り手の存在を示す表現は、果たして先に述べた「語り手の存在を認識させる表現」だけなのであろうか。今回は、もうひとつの表現として推量表現に注目したい。そしてこの作品中では「あろう・かもしれない・らしい・なかろうか・よう」等による推量表現が見られる。

推量表現はその性質が主観性をおびているだけに、推量している主体の存在がより強く読み手側に意識される。推量表現のそういった性質を、「美食倶樂部」中の推量表現の実際例と照らし会わせ、推量している人物（以後「推量主体」とする）は誰なのかということと語り手の存在との関係を考察してみたい。

恐らく、美食倶樂部の會員たちが美食を好むことは彼等が女色を好むのにも讓らなかったであらう。彼等はみんな怠け者ぞろひで、賭博をうつか、女を買ふか、うまいものを食ふより外に何等の仕事をも持つては居なかつたのである。なにか變つた、珍らしい食味にありつくことが、美しい女を見附出すのと同じやうに彼等の誇りとするところ、得意とするころであつた。さう云ふ食味を作

り出す有能なコックがあれば――、天才のコックがありさへすれば、彼等は一流の美妓を獨占するに足るほどの金を出しても、それを自分の家の料理番に雇ふかもしれなかった。「藝術に天才があるとすれば、料理にも天才がなければならない。」と云ふのが、彼等の持論であつた。何故かと云ふのに、彼等の意見に從ふと、料理は藝術の一種であつて、少なくとも彼等にだけは、詩よりも音樂よりも繪画よりも、藝術的効果が最も著しいやうに感ぜられたからである。彼等は美食に飽滿すると――、いや、單に數々の美食を盛つたテエブルの周圍に集まつた一刹那の際にでも――、ちやうど素晴らしい管弦樂を聞く時のやうな興奮と陶酔とを覺えてそのまゝ魂が天へ昇つて行くやうな有頂天な氣持ちに引きあげられるのである。美食が與へる快樂の中には、肉の喜びばかりでなく靈の喜びが含まれて居るのだと、彼等は考へざるを得なかつた。尤も、悪魔は神と同じほどの權力を持つて居るらしいから、料理に限らず凡ての肉の喜びも、それが極端にまで到達すれば其の喜びと一致するかも知れない。……

で、彼等はいづれも美食の爲にあてられて、年中大きな太鼓腹を抱へて居た。勿論腹ばかりではなく、身體中が脂肪過多のお蔭ででぶでぶ肥太り頰や腿のあたりなどは、東坡肉の材料になる豚の肉のやうにぶくぶくして脂ぎつて居た。彼等のうちの三人までは糖尿病にかゝり、さうして殆ど凡ての會員が胃擴張にかゝつて居た。中には盲腸炎をおこして死にかゝつたものもあつた。が、一つには詰まらない虚栄心から又一つには彼等の尊奉する「美食主義」に飽く迄も忠實ならんとする動機から、誰も病氣などを恐れる者はなかつた。「われわれ會員は、今に殘らず胃癌にかゝつて死ぬだらう。」と、彼等は互いに笑ひながら語り合って居た。彼等は恰も、肉を柔かく豐かにするために、暗闇に入れられてうまい餌食をたらふく喰はせられる鵞の境遇によく似て居た。餌食の爲に腹が一杯になつた時が、彼等の壽命の終る時かも分からなかつた。その時が來るまで、彼等は明け暮れげぶげぶともたれた腹から噫を吐きながら、それでも飽食することを止めずにいきつゞけて行くのである。

右の引用は、「美食倶樂部」の冒頭一章の全文章である。そして傍線部は一章の中で、推量表現を文末に持つ文である。（文末の推量表現に限ったのは、推量表現が陳述部分にあるだけにその文全体の推量する主体が分かりやすいという理由からである。）一章の文章中には文末に推量表現を持つ四文がある。

・恐らく、美食倶樂部の会會員達が美食を好むことは彼等

が女色を好むのにも讓らなかったであらう。

・さう云ふ食味を作り出す有能なコックがあれば――、天才のコックがありさえすれば、彼等は一流の美妓を獨占するに足るほどの金を出しても、それを自分の家の料理番に雇ふかもしれなかつた。

・尤も、悪魔は神と同じほどの權力を持つて居らしいから、料理に限らず凡ての喜びも、それが極端にまで到達すれば其の喜びと一致するかも知れない。……

・餌食の爲に腹が一杯になつた時が、彼等の壽命の終る時かも分からなかつた。

この四文の推量主体は誰であるか考えた場合、この段階ではまだ誰と確定することは出来ず、誰が推量しているのだろうという疑問の段階にとどまっている。しかしこの推量主体が「彼等」を客観視し、そのうえで「彼等は～であろう」等と推量している人物であることは読み手側に意識される。特に、

・尤も、悪魔は神と同じほどの権力を持つて居らしいから、料理に限らず凡ての肉の喜びも、それが極端にまで到達すれば其の喜びと一致するかも知れない。

この一文では「彼等」とは関係なく、推量主体自身の考えを客観的に述べている。そして、読み進めて行くいちに先に引用した三章の最後の部分、

・そこで、美食倶樂部と云うものが大體どんな性質の會合であり、目下どんな状態にあるかと云ふことは以上の記事でざつと者諸君にお分かりになつたであらうと思ふ。作者は次の物語を書く爲に、豫め此れだけの前書きをして置く次第である。

ここで初めて「作者」が登場し「彼等」を客観視していた人物は実は「作者」であって、「彼等」は「作者」に語られていたのだということが認識される。しかし、ここで「作者」が語り手として登場する以前に、読み手側は冒頭から既に、「彼等」を物語世界外から客観視している人物がいることに、推量表現の推量主体を考えることによって気付き、その推量主体が「彼等」を語る語り手なのではないかということを意識する。そして、「作者」が登場したところで語り手もそして推量主体も「作者」であったことを理解するのである。つまり、「美食倶樂部」の一章に於ける推量表現は語り手の存在を読み手側に意識させるものなのである。

三、中心人物の変化

ところで、「美食倶樂部」では、物語世界内に生きる登場人物のなかでも中心的役割をする人物が、筋の展開に伴って変化している。始めは美食倶樂部の会員達「彼等」であり、次にその「彼等」の中から「G伯爵」が中心人物として選ば

れる。そして「A」に中心が移り、徐々に「A」の姿も薄れて来る。推量表現と語り手の存在の関係について述べたところで、さらに、「美食倶樂部」に於ける文末推量文の個々の事例について中心人物の変化の流れに沿って考察を加えて行きたい。

◆「彼等」中心

冒頭から、三章の最後で「作者」が顔を出すまでが該当部分であるが、ここにある文末推量文は既に挙げた四文（一九～二〇頁参照）に加えて

・實際彼等は食意地の爲めに皆少しづゝ氣が變になつて居るらしかつた。

の一文があり、この文も他の四文同様に語り手である「作者」が推量主体であると考えられる。

というのも、物語世界の筋を運ぶ役割をしている中心的視点をもつ人物（この場合「彼等」）を客観視出来るのは、物語世界外にいる語り手でしかないからである。つまり、この部分で「作者」は美食倶樂部がいかなる人間の集まりであるかを延々と説明し、ところどころで「彼等」の行いに対する客観的な意見を推量表現を用いて述べているのである。

◆「G伯爵」中心

G伯爵は倶樂部の會員のうちでも、財力と無駄な時間とを一番餘計に持って居る。突飛な想像力と機知とに富んだ、一番年の若い、さすして又一番胃の腑の強い貴公子であつた。僅か五人の會員から成る倶樂部のことであるから、別段定まった會長と云ふものがある譯ではないけれども、倶樂部の會場がG伯爵の邸の樓上に設けられてあつて、其處が彼等の本部になつて居る關係から、自然と伯爵が倶樂部の幹事であり、會長であるが如き地位を占めて居る。從つて、何か知ら素敵な料理を發見して思ふさま美食を貪りたいと云ふ伯爵の苦心と焦慮とが、外の會員たちよりも一倍激しかつたことは茲に改めて陳述するまでもあるまい。又外の會員たちにしても、平成から誰よりも創造の才に長けてゐる伯爵に對して、最も多く發見の望みを嘱して居ることは勿論であつた。若し賞金を貰ふ者があるとすれば、それはきつと伯爵だらうと皆が期待して居た。全く賞金ぐらゐは出してもいゝから、なにか伯爵が素晴らしい割烹の方法を案出して、沈滞しきつた一同の味覺を幽玄微妙な恍惚の境へ導いてくれる事を、心の底から祈らずには居られなかった

「料理の音樂、料理のオーケストラ。」

伯爵の頭には終始此の言葉が往來して居た。

これは四章の冒頭であるが、四章に入ると、「彼等」の中

から倶樂部の會員のうちでも、財力と無駄な時間とを一番餘計に持つて居る、突飛な想像力と機知とに富んだ、一番年の若い、さうして又一番胃の腑の強い貴公子」である「G伯爵」が選ばれ、中心的視点は彼に移る。そして、この作品のほとんどが「G伯爵」の体験を通して筋が運ばれて行くのであるが、この「G伯爵」中心部分に於いても語り手の存在していることは十分認識される。そのうえで「G伯爵」中心部分での文末推量文の推量主体は誰かと考えると、前述の「彼等」中心部分の例とは異なり、「G伯爵」を物語世界外から客観的に見ていると思われる文末推量文は見当たらない。強いて挙げるとすれば、

・あの前へ来た時に伯爵はちよいとたち止まつて鼻をヒクヒクやらせた。（中略）が、すぐにあきらめたと見えて、又ステツキを振りながら、すたすたと九段の方角へ歩き始めた。

この部分だけである。傍線部は文末ではないが、「すぐにあきらめた」と判断したのは「G伯爵」ではなくて、彼を客観視している語り手である。ここで語り手は顔を出していると思われる。しかし他にはこのような例は見つからない。では「G伯爵」中心部分の文末推量文での推量主体はだれであるのか。具体例を挙げながら検討したい。

まず、「G伯爵」のみが推量主体であると思われるものから検討しよう。

『浙江會館』と云うへば、恐らく日本に在留する浙江省支那人の倶楽部であらう。

この一文であるが、前後を含めて引用する。

たつた一つ、門の眞上にあたる軒端の邊りに光の鈍い電燈が燈つて居て、それが例の看板の文字を覺束なく照らして居る。看板と反對の門の柱には呼鈴が取り附けてあつて、“Night Bell”と云ふ英語と、「御用の御方は此のベルを押して下さい」と云ふ日本語とが、名刺大の白紙に記されてある。けれども、どれほど伯爵が此の家の支那料理に憧れて居るにもせよ、まさかに呼び鈴を押して見るだけの勇氣はなかつた。「浙江會館」と云へば、恐らく日本に在留する浙江省の支那人の倶楽部であらう。其處へ唐突に割り込んで行つて、彼等の宴會の仲間へ入れて貰ふと云ふ譯にも行くまい。

――そんな事を考へながらも、伯爵は執念深く鎧戸にぴつたり顔を寄せ付けて居た。

右の引用からから分かるように、一重傍線部の文末推量文の後に二重傍線部「そんな事を考へながらも、伯爵は執念深く鎧戸にぴつたり顔を寄せ付けていた。」と続いている。要するに一重傍線部とその直後の一文は「そんな事」にあたる部分で、伯爵の心中の言葉なのである。

このことから一重傍線部の推量主体は「G伯爵」であると断定してかまわないだろう。

次に、「G伯爵」と語り手の両方が推量主体と考えられる場合である。

寝ても覺めても伯爵は食物の夢ばかりをみた。……氣が着いて見ると暗い中から白い煙りが旨さうにぽか〳〵と立つて居る。恐ろしい好い香がする。餅を焦したやうな香だの、鴨を燒くやうな香だの、豚の生脂の香だの、薤蒜玉葱の香だの、牛鍋のやうな香だの、強い香や芳しい香や甘い香がゴツチヤになつて煙の中から立ち昇つて來るらしい。ぢつと暗闇を見詰めると煙の内で五つ六つの物體が宙に吊り下がつて居る。一つは豚の白味だかこんにやくだか分からないが兎に角面白いくて柔らかい魂がぶる〳〵と顫へて居る。（中略）貝の蓋が頻に明いたり閉じたりして居る。そのうちにすうツと一杯に開いたかと思ふと、蛤でもなければ蠣でもない不思議な貝の身が、貝殻の中に生きて蠢いている。……身は上の方が黒く堅さうで下の方が痰のやうに白くとろとろしたものらしい。其のとろとろとした白い物の表面へ、見てゐるうちに奇怪な皺が刻まれて行く。

右の引用中の文末推量文は傍線部の通りである。この推量主体を考える。傍線部の二文は「G伯爵」の見た夢について述べられている部分にある。夢を見たのは伯爵であるところから考えると、「G伯爵」が「立ち昇つて來るらしい」「とろとろしたものらしい」と推量しているのであって、この二文の推量主体は伯爵であると考えるのが普通だろう。しかし前にも述べたように、「G伯爵」中心部分にも語り手が存在するという前提は動かせない。語り手の存在が消滅していない限り、物語世界外の語り手の視点は物語世界内で活動している「G伯爵」の視点と共に生きているのである。そうすると、この二文の推量主体は語り手である「作者」かもしれないという可能性も考えられる。

伯爵の足は自然と其の方へ向いて二三町辿って行つた。何でも一つ橋の袂から少し手前のとある邸の塀に附いて左に曲つた路地の突きあたりのところであつた。見ると戸を鎖したしまうた家の多い中に、たつた一軒電燈を煌々と點じた三階建ての木造の西洋館がある。胡弓と拍手の音とは疑ひもなく其の三階の樓上から湧き上がるので、バルコニーの後ろのガラス戸のしまつた室内には、大勢の人間が卓を圍んで今しも饗宴の眞最中であるらしい。G伯爵は、音樂――殊に支那の音樂にすは何等の知識をも持つて居なかつたが、露臺の下に立つて胡弓の響きに耳を傾けて居るうちに、その不思議な奇妙な旋律がまるで食物の匂ひのやうに彼の食欲を刺激するのを覺えた。

右の実線傍線部の推量主体も話の流れとしては「G伯爵」と考えられる。しかし、直前の一文「見ると戸を鎖したしまうた家の多い中に、たつた一軒電燈を煌々と點じた三階建ての木造の西洋館がある。」に注目すると、誰が「見ると」西洋館があったのかが問題となる。なぜなら、西洋館を見付けた伯爵の視点の側には語り手の視点も存在するからである。そうするとここでも「G伯爵」が「見る」という場合と語り手が「見る」という場合の両方が考えられる。文末推量文の前文で既に「G伯爵」、語り手、両方の主体の存在の可能性を意識するため、それに続く「胡弓と拍手の音とは疑ひもなく其の三階の樓上から湧き上るので、バルコニーの後ろのガラス戸のしまつた室内には、大勢の人間が卓を圍んで今しも饗宴の眞最中であるらしい。」の推量主体について伯爵であるか語り手であるかという疑問が強くなる。

しかしこの場合、どちらであるかを決定することが目的ではない。「G伯爵」と語り手の両方の視点が存在することは否定出来ない事実である。その事実をふまえると、「G伯爵」中心部分では、物語世界内に生き自らの行動によって筋が運ばれている「G伯爵」の視点に語り手の視点がぴったりと寄り添い、語り手は伯爵が見るように物事を見、伯爵が推量するように見た事に対して推量していると言える。前述したように、筋を運ぶ役割を担っている人物を客観視出来るのは物語世界外にいる語り手でしかなく、それが、前項の「彼等」中心部分での推量主体が語り手である所以であったが、「G伯爵」中心部では当の伯爵を客観視している部分が見当たらない。そのため推量主体としての語り手の存在は消えてしまいがちであるが、実は「G伯爵」を客観視する立場から伯爵の視点と並列化する立場へと語り手が変化しているのであって、語り手の存在は依然として保たれているのである。

しかし、両方の視点が存在すると言っても、その割合が常に全く同じ訳ではなく、中には語り手の視点の方がより勝っている文末推量文もある。次にその例を挙げる。

・とても平生の伯爵には出来ない藝當であるけれど、其れは恐らく伯爵の眞心が――世にも珍しい熱心な、意地穢なの欲望が、天に通じた結果であつたのだらう。

・或は伯爵を氣違ひだと思つたのかもしれない。

まず一つ目の文であるが、この文の問題点は、果たして伯爵自身の欲望が「世にも珍しい熱心な、意地穢なの欲望」であると認識していたかどうかである。この作品に描かれている美食に対しては盲目的な伯爵の性格からは、自分をこのように客観的に見ていたとは思えない。二つ目の文でも、伯爵が果たして自分が気違いだと思われているかもしれないことに気付いていただろうか。つまり、この傍線部の判断は語り手が伯爵を客観視していることの結果なのであり、内容が辛辣

であるだけによけいその印象が強い。右の二文は推量主体としては語り手の方が前面に出ている例である。

これと同じようなことは先に述べた「彼等」中心部分にも言える。この部分では一貫して語り手が推量主体であり、語り手の存在が比較的強く読み手側に伝わって来ることは説明済みであるが、語り手による「彼等」に対する辛辣で客観的な判断が語り手自らの存在をより印象付けている表現が多くある。

・実際彼等は食意地の爲めに皆少しづゝ氣が變になつて居るらしかつた。

この一文では「彼等」が自分達が気が変になりつつあると気付いていたとは思えない。これも語り手の判断である。

◆「A」中心

筋を運ぶ働きを持つ人物は「G伯爵」から「A」へ移る。この「A」中心部の推量表現であるが、その数が一文のみと非常に減っている。（文中にあるものを含めても二文）その大きな原因は次の一文にある。

・作者は假りに其の會員の一人をAと名付けて、此れから次後の出來事を、Aの氣持ちになつて説明しよう。

この文を境にして中心的人物は「A」の気持ちになると宣言した以上、もはや「A」を物語世界外から客観視し、～であろうか、～かもしれない、と推理することは出来ない。「A」だけでなく何か物事に対して推量する場合、「G伯爵」中心部分でも示したように「A」と語り手両方の目が生きてくることになるので、完全に作者が「A」の気持ちになりきる為には推量表現は不適切なのである。そのため、この「A」中心部分では推量表現が非常に少なくなってしまうのである。

しかしこの、「A」中心部に於いても語り手が存在することは言うまでもなく、「作者」も「A」の気持ちになると宣言したからと言って自らの存在を消し去った訳ではない。その現れとして、「作者」が「A」の気持ちになりきれていない部分がある。

「それにしても此のぬら〳〵した物質は何だらう。――此の汁の味は決して自分に經驗のない味ではない。自分は何かでこのやうな味を味はつた覺えがある。

Aは猶も舌の先でべろべろと指を舐め盡しながら考へて見る。と、何だか其れが支那料理のハムの匂に似て居ることを想ひ浮べる。正直を云ふと、彼は疾うから想ひ浮べて居たのかも知れないのだが、あまり取り合はせが意外なので、ハツキリ其れとは心付かずに居たのであつた。

「そうだ、明らかにハムの味がする。而も支那料理の火腿の味がするのだ。」

此の判断をたしかめる爲に、Aは一層味覺神經を舌端に

集めて、ます〳〵 指の周りを執拗に撫で、見たりしやぶつて見たりする。怪しい事には、指の柔らかさは舌を持つて厭せば厭すほど度を増して來て、たとへば葱か何かのやうにくたくたになつて居るのである。Aは俄然として、人間の手に違ひなかつた物がいつの間にやら白菜の莖に化けてしまつた事を發見する。いや、化けたと云ふのは或は適當でないかも知れない。なぜかと云ふのに、それは立派に白菜の味と物質とから成り立つて居ながら、いまだに完全な人間の指の形を備へているからである。現に人さし指と中指には元の通りにちやんと指輪が嵌まつてゐる。さうして掌から手頸の肉の方へ完全に連絡して居る。何處から白菜になり、何處から女の手になつて居るのか、その境目は全く分からない。云はゞ指と白菜との合いの子のやうな物質なのである。

右の傍線部が「A」中心の部分に見られる推量表現の全てであるが、その推量主体は語り手であると考えられる。まずは初めの方の例であるが、もし「作者」が完全に「Aむの気持ちになっていたとするならば「想ひ浮かべて居たのかも知れないのだが」ではなく「想ひ浮かべて居たのだが」となるべきであろう。そこに推量表現を入れる余地はないのである。さらに重要なのは、他のところでは「Aは」と言っているのに初めの傍線部部分だけ「彼は」と言っている。このことは「A」になりきれていないことの表れである。さらに、後の方の例は、語り手の存在を認識させる表現の一つの、語り手の語る行為の明示に通づるものである。つまり、「化けた」と表現すること、語ることが「或は適當でないかも知れない」と推量している訳で、推量主体はやはり語り手であろう。

筋を運ぶ中心人物の気持ちになりきれていない部分があると言うことは、この作品にとって非常に重要なことである。より完全な語り手の姿は、「彼等」「G伯爵」「A」といった登場人物になりきって話の筋を運ぶことである。言い換えると、物語世界外にしか生きることの出来ない語り手の立場を少しでも物語世界内に近づけようとするものなのである。語り手が完全に物語世界内に入り込むことが出来た場合には、読み手側は語り手の存在に気付くとこはないだろう。そして、（逆説的になるが、）このような場合には自分自身としては語り手の存在を認められる作品とは考えない。しかし、この作品のように所々であえて語り手が顔を出し自分の存在を知らせたり、登場人物の気持ちになりきれていなかったりすると、読み手側は語り手の存在を意識させられてしまう。その一つの例が、次に述べた推量表現を含む文である。ここに物語世界内に生きようとする語り手の意志と、それでも物語世界外に生きざるを得ない語り手の性質との葛藤が見られるのである。

◆「作者」中心

「A」中心部の次は「作者」が中心の部分、つまり語り手である「作者」が誰の気持ちにもならず、物語世界外から物語世界内に向けて自分の意見を述べる部分である。次はその「作者」中心部分の全文章であり「美食倶樂部」の最終部分である。

以上の記述は、G伯爵の奇怪なる美食法に關して、僅かに其の片鱗を窺つたゞけのものに過ぎない。片鱗に依つて其の全般を推し測るには餘り多くの變化に富んだ料理ではあるけれども、而も伯爵の創造の方が無盡藏である限り、作者が如何に宴會の回數を追うて詳細な記述を試みるとしても、要するに其の全般を知了することは不可能なのである。そこで已むほ得ず第三次より第五次、第六次にいたる宴會の獻立の内から、最も珍らしい料理の名前を列記するに止めて一先ず筆を擱くことにしよう。即ち左の通りである。

鴿蛋温泉　葡萄噴水　咳唾玉液　雪梨花皮
紅燒唇肉　胡蝶羹　天鵞絨湯　玻璃豆腐

賢明なる読者の中には、此等の名前がいかなる内容の料理を暗示して居るか、大方推量せられる人々もある事と思ふ。兎にも角にも美食倶樂部の宴會は未だに毎晩G伯爵の邸内で催されつゝあるのである。此の頃では、彼等は最早や美食を「味はふ」のでも「食ふ」のでもなく單に「狂」つて居るのだとしか見受けられない。氣が違ふか病死するか、彼等の運命はいづれ遠からず決着する事と作者は信じて居る。

この部分では今まで問題としてきた推量表現は見当たらないが、「作者」は自分が語り手であり物語世界外の人間であることを積極的に明らかにしている。そのことは「作者が如何に宴會の回數を追うて詳細な記述を試みるとしても」或いは「そこで已むを得ず第三次より第五次、第六次にいたる宴會の獻立の内から、最も珍しい料理の名前を列記するに止めて一先ず筆を擱くことにしよう」等の表現からも充分理解出来る。

しかし、このように語り手の立場が明確な部分に於いてさえ、物語り世界内に入り込もうとする語り手の気持ちが現れている。最後の三文に注目してほしい。いままで「作者」が語ってきた内容は少なくとも語っている時点よりは以前のことであり、物語世界内物語と物語世界外とでは時間的ギャップがあった。しかし作品の最終部分で、物語世界内と物語世界外とが時間的に同一線上に並び、語り手と登場人物達が同じ時間を生きている。ここでは、語り手にとっての「今」は「彼等」にとっても「今」なのである。ここにも語り手の、物語世界内に入り込もうとする気持ちと物語世界外に生きざ

るを得ない立場との葛藤が見られる。が、物語世界内に近づこうとする姿勢でこの作品が終えられていることは興味深い。

四、結　論

推量表現は、その推量主体を意識する点において語り手の存在を認識する材料となる。この「美食倶樂部」は推量主体が誰であるかを考えることによって、時には独立し、時には登場人物にぴったりとより添った語り手の存在を作品全体に認めることが出来る作品であると言える。

そしてこの作品についてもう一つ特徴的なことは、物語世界内外の境に於ける語り手の葛藤である。前述したように、語り手の存在を示す表現が語りの表現であり、その語り手の生きる世界は物語世界外である。しかしその立場にも拘らず、登場人物になりきろうとする語り手の基本的姿勢、推量表現に於ける登場人物と語り手の視点の並列化、登場人物と「今」を同じにしようとする試み等に、語り手の世界は物語世界の外にあると認識している読み手側も、ややもすると語り手もろとも物語世界内に引き込まれて行くのである。この「美食倶楽部」という作品では、一見対立すると思われる二つの役割を語り手である一人の「作者」という人物が果たしているのである。